

まつりの組織

伊藤, 芳枝
山口女子大学

<https://doi.org/10.15017/2231573>

出版情報 : 九州人類学会報. 4, pp.24-26, 1976-12-10. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :

まつりの組織

山口女子大学 伊藤芳枝

祭の組織について、山口県下の事例を2、3紹介する。中世の資料によると鼓頭や刀祢といわれるものが祭礼の舞楽や神楽などを主宰していたことが知られる。(防長古文書誌・風土注進案など参照)

鼓頭や刀祢がどのように宮座を構成していたか資料に乏しいが、それらは村落内で神事の頭役、司祭者としての機能を持っていたばかりでなく、郷村制の下で惣郷の祭には、村を代表して祭役分担を引受けた代表的な役職者層(notables)であったと考えられる。

豊浦郡阿川地方では、元禄ごろから浦の漁業権をめぐる論争がおこるようになって、その結果村方役人で構成する本座に対抗し、浦の者たちの新座(浦座)が結成された経緯がある。(『社会と伝承』3の3の伊藤忠芳氏報告参照)。祭祀組織における変化は、社会構造の変化と対応している例とみることができる。

防府市小俣の大歳社に伝わる「笑講」は、輪番制の頭屋祭であるが、これはもと小俣庄を開発した名主の系譜をひく21戸の家で構成された宮座と考えられる。この行事は儀礼的笑いの所作が中心にあり、呪術宗教的な予祝の祭儀となっている。(松岡利夫氏の『瀬戸内海地域における神社祭祀と地域社会』の研究分担報告参照。)

宮座とは近畿に濃厚に分布する祭祀組織に対して与えられている名称であるが、宮座とは呼ばれなくても、同じような類似した形の祭祀組織が講とか、頭屋制の祭という形でほぼ全国的に分布していることが明らかにされている。

従来、歴史学、民俗学の方からの多くの業績があり、宗教学、社会学、人類学の分野から調査研究がさまざまになされてきている。一方において宮座の起源や祖型についてあるいは宮座の変遷に対する関心があり、他方には宮座の構造と機能についての関心がある。宮座の研究は従来大きく2つの方向からなされてきたと考えられる。

肥後和男博士の「近江における宮座の研究」とそれにつづく「宮座の研究」とは、最も代表的な業績であり、古典的研究とされている。昭和10年から12年にかけての近畿一円の分布の実地調査をもとに、宮座を「座といわれる行事を伴う神事組合である」と定義し、株座と村座の二種類があると指摘されている。宮座の構造を明らかにする視点として、司祭者(神主)の選定の方法、神主・総代・神職の三者の関連の問題、男子の年令階梯制の問題の3つをあげ、宮座を村落構造と結びつけて分析する重要性をとしている。

このあと歴史学の方から記録文書によりつつ、宮座の個別的研究が発表された。中世の祭祀組織の構造とその近世的展開について(萩原竜夫)、紀北宮座の研究(安藤精一)、講集団の成立過程の研究

(桜井徳太郎)、中世協同体の研究(和歌森太郎)などの先学の研究業績がある。

民俗学者の宮座に関するフィールド・データは数多く、とくにここでは村落的理解よりも儀礼的局面的観察の方に傾斜した報告が豊富に蓄積された。この背景には、日本文化のエトスは祖先崇拜および氏神祭祀を中核とした民間信仰の基層の上に形成されたとの視点に立つ柳田国男の文化理解の影響がある。

宮座と村落構造の関連についての社会学的追求は以上と比べて少ない現状である。有賀喜左衛門教授や福武教授などこの方向の研究は、祭祀組織と村落構造とが多面的に結びついており、その組織が村の社会的統合に積極的の意味をもっているという一つの仮設に立って、村を一つの単位として調査検証しようとする。

村落の構造やその歴史的構成を背景として形成された宮座は、今日からみると過去のものとなって重要な位置をしめていないとも考えられるが、先覚たちの研究の成果から、後進として宮座の現在の意味を積極的に明らかにすることに努力を注ぐべきであろうと思われる。

原田敏明教授は「社会と伝承」誌を中心に柳田民俗学の方向とは違った独自の観点から、宮座の祖型、理念型を把握しようとする。社会人類学、民族学の領域からも村落構造の分析をする上で宮座が重要な指標となるとの問題提起がなされており、更には日本民族文化の源流に宮座をすえ、日本の心性を理解すること、日本文化全体を把握することが可能ではないかとの将来の展望も開かれようとする現状である。

さて宮座はその概念がまだ依然として未整理の感がある。ここで宮座とはどのような特徴をもつものなのかについて、いくつかの問題点をあげて結びとしたい。

1. 宮座の神の観念について

柳田国男博士の同族神=祖先神=氏神という基本的理解に対し、見解が分かれるという点である。

原田敏明教授はこれに対立的、否定的見解を示される。また宮座の神は至上神に近いとみる見解もある。(住谷一彦「宮座論ノート」『社会と伝承』14の3参照)

2. 当屋の制度について

当屋は自らその神をいつき、自ら神となり神主として一年交替で責任と義務を果たす。宮座は基本的性格の一つとしてこの当屋の制度をもつものである。

3. 宮座の閉鎖性について

宮座は閉鎖的であり、秘密結社的、秘儀的団体であるという見解が日本民族の起源などをめぐる討論において岡正雄教授の指摘された点でもある。

4. 宮座の原初形態は、村に一つの社があり、その座が宮座であり、その神の祭の時の座であるという意味である。(原田敏明教授「宮座について」『社会と伝承』6の1、その他参照)

5. 宮座の長老制・年令階梯制の問題

宮座は年令階梯制であり、一定の年令に従って階梯を順々にのぼっていくとみる見方(高橋統一氏)と、宮座は年令階梯制であるよりも長老制と考えられるとの原田教授の見解があり、また、長老が一

定の定員数だけいて、それが最上の階梯にいて、その定員に欠員が生じた時、下の階梯から引上げられていくという点を住谷一彦氏は指摘している。

筆者はかつて筑前地方嘉穂郡、その他数ヶ所の宮座を調査したことがある。九州の宮座と近畿の宮座のパターンの比較というようなことは極端な試みかと思われるが、概して筑前の宮座は座内部は平等、民主的で、座外のものに対して特権的な性格をもつというように見られる。それに対して、近畿地方の宮座は貴族的性格がより強いという予測をもたせられるのである。